

日本LD学会第32回大会（@広島） 自主シンポジウム43

「障害の社会モデル」の視点からの「自己理解」再考

# 自己理解の促進に寄与する アセスメントツールの活用

菊地 創

松蔭大学 コミュニケーション文化学部 専任講師

発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業などはありません



## 菊地 創（きくち そう）

- 所属：松蔭大学コミュニケーション文化学部 専任講師
- 学位・資格：博士（心理学）、臨床心理士、公認心理師
- 臨床歴：精神科病院（7年）、児童相談所（5年）、保健所（1年）などで心理職として従事し、2022年より現職

## 話題提供趣旨

- 発達障害特性（特にASD特性）を有する大学生の自己理解の促進、二次障害の低減に寄与する社会モデルを踏まえたアセスメント（ツールの活用）とはどのようなものなのか考えたい

## 問題意識

- 心理アセスメントの領域では医学モデルを脱却したストレンジスアセスメントモデルの重要性が認識されている
- 一方で、アセスメントツールによって示された「強み」が十分に自己理解や二次障害の低減につながっていないように見受けられるケースも珍しくない

# アセスメントツールを実施する目的

- アセスメントツールの実施目的は「診断（補助）」ではなく、**学生本人（当事者）の自己理解の深化**である
  - 障害が個人と社会の相互作用であるという視点に立つと、アセスメントツールで示される指標の多寡を用いて発達障害を診断・判定するための決定的な根拠を得ることには限界がある
- **自己理解の深化 = 腑に落ちる理解**（×頭での理解）
  - 情報が個体に入力された後に起き、情報から導き出される行動の生起頻度を上げる認知的状態（重松他，2017）⇔頭での理解

## 強み（ストレングス）を含めた自己理解

- 特に，発達障害学生支援では，苦手な領域だけでなく，自身の「強み」を含めた自己理解の深化を支えることの重要性がしばしば指摘されている（古長，2020）

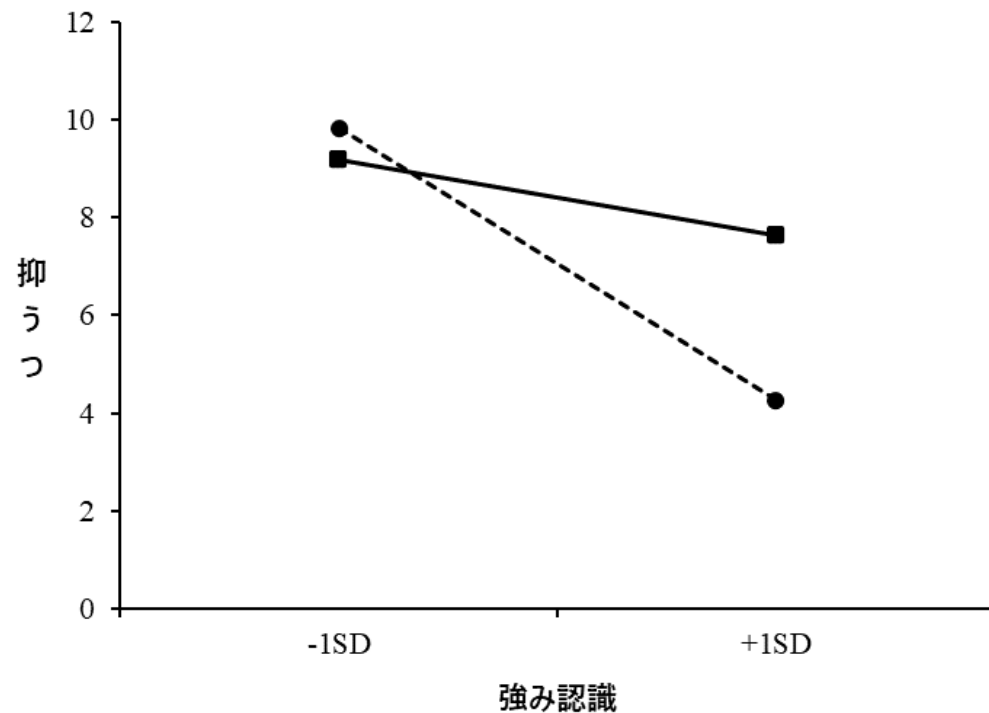


- 強みを含めた自己理解とはどのような状態なのか？
- 自身の強みを認識していれば，それで十分なのか？

# アナログ研究での知見

Figure1 ASD特性×強み認識の交互作用

注) 実線がASD特性+1SD、破線がASD特性-1SDを示す



- 大学生173名を分析対象
- ASD特性を有している学生において「**強みの認識**」は抑うつの低減に有意な効果を示さなかった
- 詳細は、日本健康心理学会第33回大会 (@神奈川大学) にて発表予定

## なぜ？「強みの認識」では不十分？

- ASD者は対人関係上の課題から二次障害が生じる（桐山・石川，2014）  
⇒（対人関係の苦手さはあるけど）記憶力が良い、単純作業が得意。これでは不十分なのではないか？
- 強みが活用感（自身の強み・特性（特に、対人関係に関わるような）が日々の社会生活のなかで活きているという感覚）が必要なのではないか？ ⇒腑に落ちる理解



## 強みの活用感（腑に落ちる理解）に至るために

- 強みの活用感（腑に落ちる理解）には日々の生活や支援者との協力的な対話を通して、体験的に理解していくことが重要⇒ 自己効力感（自己肯定）の向上
- そのためには…
  - アセスメントツールを通じた対話（リフレーミング、コンプリメント）
  - 社会モデルに関する心理教育
  - 日々の成功体験のなかで、繰り返しコンプリメント

- **アセスメントツールを通じた対話**
  - 自記式アンケートなどへの回答から具体的エピソードの確認
  - 『曖昧なことが苦手、一から十まで行ってしまおう』 ⇒ 『嘘をつかないってことだよね（リフレーミング）』 ⇒ 『○○にも言われます』 ⇒ 『そこは間違いなく美德（コンプリメント）』
  
- **ASD特性を持つ学生の悩みに「自分には長所がないように思える」というものがある（吉永，2010）。一見「障害」と思われる特性も見方を変えると「強み」になるということを伝えていく必要がある**

## ● 社会モデルに関する心理教育

- 『誰もがとりつくろったり、嘘をつかないで済む社会って実は誰によっとっても生きやすい社会だよ。つまり、社会の在り方の側に障害があるってことだよ（社会モデルの理解）』
- 『適当に取り繕ってるやつの方が、うまくいってるように感じられる場面もあるかもしれない。ある程度こういったことを理解していて、嘘をつかない、誠実なあなたを求めている上司・職場ってというのは絶対ある（コンプリメント）』
- 『生存戦略として、マジョリティを理解して、少しそれに合わせて行くってことをやっていかざるを得ない時はあるかもしれない（自分の前に立ち現れてくる社会の理解）』

## まとめ

- 強みの認識だけでなく 「強みの活用感」 が重要となる
- 強みの活用感を得るためには、「特性に対するリフレーミング」や、「強みもまた、社会との相互作用であるという社会モデルに関する心理教育」が必要である
- 対話と日々の生活を通じた、強みの活用感（腑に落ちる理解）を経て 自己効力感（自己肯定）の向上に至る